

語り合う文学教育

2011年度・第8号 11月9日

身体に気をつけて！

と言うのは、10月例会の報告を予定していた二人が、それぞれ体調を崩されたからです。

10月8日（土）三重例会も、15日（土）奈良例会も、報告を予定していた方が二人とも、ドクターストップでした。今頃はもう快復されていることと思いますが、みなさん、季節の変わり目です。気温の変化、空気の乾燥、北からはやりだしたインフルエンザ、気をつけましょうね。

お二人の発表予定だった内容は、機関誌『語り合う文学教育』10号に掲載予定です。お楽しみに。

★三重例会は…

14名の参加でした。先月の通信No.7に載せたわたし（橋本）の物語の授業について、原稿を読んでもらいました。藤原先生からは、文学作品は語られていることがすべてだから、どう語られているか、どう描かれているかに、もっと注意深くありたいというご指摘をいただきました。

そのあと、望月さんが来られていたので、これから実践される「かさこじぞう」の教材研究をみんなでしました。

★奈良例会は…

8名の参加でした。もう一人の報告者の福村さんはお元気だったので、福村さんのクラスのように「海の命」の教材研究をしました。これは後でふれます。

☆ 11月 3日（木・文化の日）三重民教連集会☆

三重県の若い先生向けに民教連が企画した集会です。総勢63名の参加がありました。語り合う会では、わたしと守田先生が一つずつ講座形式の分科会を持ちました。概要をそれぞれ次のようにまとめました。

国語科教育Ⅰ・物語の授業 担当・橋本博孝 参加者・27名

はじめに、物語を読むとはどういうことかから考えました。

物語の読みは情報処理とは異なります。最近の学力調査問題を見ていると、物語であろうと説明文であろうと情報として扱い、その処理能力の効率だけが競わされているように思えます。物語の読みは意味の創出です。そして、そのことを通しての自己の問い直しです。

次に、実際の授業を進める上で、まず教材研究の要は何か、ついで授業の要は何か、を考えました。

(1) 教材研究の要は、登場人物とできごとだけを対象にしないことです。それは、あらすじで教材を見ているようなものです。何が描かれているか、よりも、それがどのように描かれているか（語られているか）が大切です。このことを西郷再話と内田訳の二つの「大きなかぶ」で具体的に考えました。

(2) 授業の要は、登場人物の「気持ち・心情」へのこだわりを捨てることです。どんな場面でも登場人物の気持ちを読もうとするのは、日本の文学教育100年の病です。それには4つの誤りがあります。

- ①物語の虚構を壊す。
- ②気持ちの追求に終わって人物像が明らかにならない。
- ③読み手は登場人物を自分の分かる範囲でしかとらえない。
- ④読みの次元が、できごとにとどまり語りにせまれない。

このことを「モチモチの木」で考えました。

国語科教育Ⅱ・説明文の授業 ー教材研究の進め方と授業づくりー

担当・守田庸一 参加者・17名

これまで、要点・要旨・要約指導に終始する説明文の授業が批判され続けてきました。

そうした授業を変えようとする三重県下の学校や先生方の取り組みが、実を結びつつあるように感じています。こうした動向を受けて本講座を行いました。

講座では、まず、国語科の授業を考える上での前提について話しました。国語科で求められるのは正解ではなく藤原和博氏の言う「納得解」であること、そして授業では「納得解」を得るプロセスを尊重することを強調しました。合わせて、このプロセスにおける子どもの論理をとらえるための手だてとして、三角ロジックを紹介しました。

その上で、後半では、これからの説明文の授業を考えるためのポイントに焦点を絞りました。具体的には、次の二点について、教科書教材を取り上げながら述べました。

①読者がいなければ文章はインクのシミでしかない。文章を文章たらしめているのは、インクのシミを意味づけ価値づけている読者である。説明文の授業においても、読者である子どもがどのように文章を意味づけ、価値づけているかを問題にしなければならない。

②日本の国語科教育（特に読むことの教育）では、書いてあることを確認するという“情報再生型学力観”が支配的であった。これからは、“書いてあることから書いてないことを推論し表現する学力観”がますます求められる。

ご発言や感想文から、参加された方の問題意識の高さや読みの深さを実感しました。明日からの説明文の授業づくりに少しでも役立てばと願っています。

（この項文責・守田）

民教連というのは、民間教育研究団体連絡協議会の略称です。語り合う会ももちろん行政などから補助金を受けている団体ではない、自主的な民間の集まりです。奈良ではサ連協（教育研究サークル連絡協議会）と言うのが一般的でした。民間、民間と言っても教育委員会や行政とことさら対立しようとしているわけではありません。いっしょにできることはどんどんやっています。

わたし（橋本）が教員になった頃は、民教連が運動として活性化していた時期で、東海と近畿ブロックの合同集会には毎年 1000 人規模の教員が集いました。もちろんさまざまな課題は当時からありました。しかし、たくさんを学びました。課題からも学びました。

わたしが学んだ最大のことは、教育についての基本的な考え方です。なによりも学習指導要領の枠にとらわれない自由な発想です。学習指導要領とその制約下にある教科書を相対化できる視点を若いときに得られたのはありがたいことでした。

また、民教連では参加者が基本的に対等平等です。ベテランも新人も、勤務先も関係

なく、自由闊達に論議しました。「発問を教えてください」などと言うと、無視されるか、叱られるかしました。授業づくりは教員の権限だから自分で考えろ、ということだったと思います。我流になって自己満足してしまっただけですが、教員の自主性は大事にしていました。自立した実践者として成長していこうというのが目標でした。

こんな昔話をするのは、年寄ったからではなくて、若い先生たちが職場の管理のしくみの中で、子どもたちに対して管理的にならざるを得ない状況にあるからです。子どもたちを静かに座らせて、整然と挙手し発表する授業が望ましい授業と思込まされているかのように見えるからです。

それは、素直な謙虚さを、従順な服従とはきちがえています。謙虚な探究は批評精神につながりますが、従順な習得は奴隷根性を生むだけです。子どもにも教員にも言えることです。それが、橋下維新条例を下支えしてしまっているのではないかと危惧します。

もう一度、民教連運動のうねりを創りだし、一人でも多くの教員といっしょに、公教育とは何か、大切にすべき公共性の内実は何か、あらためて勉強したいと思います。

奈良の福村さんのとりくみも機関誌 10 号に載せていただく予定ですが、少しだけ紹介します。

奈良市は今年から東京書籍の教科書になりました。6 年上の冒頭に与田準一の「ぼくらのもの」という詩があります。第一連はつぎのとおりです。

大きくなったら
なにになるんだ、
そう聞かれたが
まだわからない。
波がさわぐ
波止場に立って、
どこへだって
自由に船出できる朝の
海にあふれるきらめき。
そうなんだ、
わかってる、
それだけはぼくらのもの
ぼくらのものだ。

二連も比喻は違いますが同じ内容です。

この詩を読んだ福村学級の子どもたちは、猛反発しました。「どこへだって／自由に

船出できる」が、嘘だ、ということです。

今だって、行きたくないけど塾に行かされている、中学や高校も自由には選べない、就職だって好きな仕事には就けないし、就職できないかもしれない、という意味のことを言ったそうです。

福村さんは、子どもたちのくらしの現実とこんなにかげ離れた教材で授業をしていていいのかと考えました。

東京書籍の6年上の物語教材は、「風切るつばさ」（木村裕一）、「ぼらの谷」（高山貴久子）、付録として「桃花片」（岡野薫子）がありますが、どうもぴったりしません。下巻のはじめが「海のいのち」（立松和平）です。

いろいろ悩んだ末に、福村さんは違う教材で授業をしようと考えました。

実は報告はここまででした。福村さんが選んだ教材は何か、それは次回のお楽しみということですが。

福村さんが、「海のいのち」をやらないでおこうと決めた理由の一つが、次のような市販テストです。

太一が「大魚はこの海のいのちだ」と思ったのはどうしてですか。一つに○をつけましょう。

- () この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないと思ったから。
- (○) この魚が、海の生き物たちやおとうたちのいのちをあらわしているように思えたから。
- () 自分が追い求めてきたまぼろしの魚だから。

こんなテスト問題は論外ですが、読みの課題としてもこの部分の語りは確かに飛躍しているようです。少なくとも読み手には、太一の論理がうかびあがりにくいですね。

「海のいのち」の評価もさまざまだと思いますが、今回は深入りしません。

福村さんは、子どもたちに「考えノート」をわたして、日記指導のように対話を続けています。日記ではなく「考えノート」なので、できごとを書くというより思索が中心になります。いくつかは学級だよりに載せて交流しています。

さて、みなさんは次の「考えノート」をどう受け止めますか。漢字変換は福村さんがされたとおりにしています。

東日本大震災で感動したこと ペットについて 有元由美さん

先月、11日に東日本を襲った大震災は、たくさんの人々の家、仕事、学校、家族、命、希望までを一瞬にして奪い、たくさんの人の心を傷つけました。

こうして大震災がおきると、日頃の自分がとても幸せであるという事がわかります。地震から三週間たった今、厳しい避難生活を未だに強いられたりする中、少しずつ復興に近づいている所もあります。

私がこの震災の中、日本を見てすごいと思った事は三つあります。

一つ目は、命をかけて職務を全うしようとする自衛隊、消防団などの人たちです。自分の家族や大切な人がいるのに、「助けを待つ人がいる」というような強い、強い正義感で働いてくれていることに感動しました。

二つ目は、日本各地、世界各地で行われているチャリティーイベント、ボランティア活動、募金活動、企業、個人の衣服や食料の提供です。自分のとくにはならないけれども、困っている人のためにという善意に感動しました。

三つ目は、被災者同士の支え合いです。

せまい避難所の中で生活は、必ずと言えるほど協力が必要になると思います。ニュースで取り上げられた所では、住民同士で食料を分け合ったり、配ったり、はげまし合ったりしていて、みんな苦しいのに助けあう事に感動したし、その「協力」は見習いたいなと思いました。

このように、わたしはニュースを見て、人間は少しずつ守られてきているのではないかなあと思いました。でも、人間に飼われているペットはどうだろうかと思えます。

ニュースでは、福島第一原発の20kmの避難指示地域の中で、牛が住宅街を歩いたり、首輪をつけた犬が歩いていました。飼われていた犬は食べ物を探し、道をさまよっていました。それなりの理由（手放さなければ避難できないなど）があったと思うけれど、全ての生き物には命があって、その命をすてるというのは避けてほしいことだなと思いました。また、その避難を指示している国や、東電も避難所にそういう施設を作るなど人以外の命も守ってほしいです。

地震大国と言われるほど地震の多い日本で起きた大地震、たくさんの人に支えられ、一日でも早い復興を願います。また、祭りなどをなんでもやめずに日本を盛り上げ、風評被害にも負けず、がんばってほしいです。

がんばれ東北！ がんばれニッポン！

この由美さんの「考え」が学級だよりで紹介されると、子どもたちからは共感の意見がたくさん出ました。内容もそうですが、書きぶりも文章の長さも、他の子どもたちは「すごいなあ」と思いました。

確かに、文章構成はしっかりしています。小学校6年生としては語彙力も豊かなんだと感じます。このような社会的な課題について考えたことも大いにほめたいと思います。実際の指導では、由美さんを評価するでしょう。福村さんもそうされたことでしょう。

が、わたしたちが考えなければならないことはそれとは別にあると思います。

一つはことばの問題です。

例えば、「東日本を襲った大震災は、たくさんの人々の家、仕事、学校、家族、命、希望までを一瞬にして奪い、たくさんの人々の心を傷つけました。」や「厳しい避難生活を未だに強いられたりする中」という表現などは、テレビの特集番組のナレーションのまま文章化したという感じです。

子どもたちが、読書やテレビなどから新しいことばを獲得していくことは悪いことではありません。しかし、それらのことばは子どもたちの暮らしに裏打ちされていないから、評論家的な用法になってしまいがちです。ペットに向けられていく問題意識も含めて、全体として感想を述べているという印象がするもの、そのせいでしょう。

次の段階では、自分のくらしの地平からこの問題をとらえなおすように指導したいと思います。例えば、福島産の農作物と地場産の物とをスーパーで見かけたらどちらを買うか、実際にはそういう計画はありませんが、除染のために取り除かれた土砂の奈良市への持ち込みを認めるのかどうか、そんなことを「考え」させたいくなります。

もう一つは、より深刻だと思うのですが、これらのことばとともに刷り込まれていく「思想」というか「道徳」というか、ものの見方の問題です。

例えば、「命をかけて職務を全うしようとする自衛隊、消防団などの人たち」への共感です。

彼らの働きは尊いものだったし、自己犠牲的な活動も見られました。しかし、それらを規範にしてはならないと思います。

ある学校の総合的学習で、遠藤未希さんを教材にした授業を見せていただきました。南三陸町で避難を呼び掛けるアナウンスを続けていた方です。残念ですが、のちに遺体となって発見されました。

野田首相が最初の国会演説で、家族を亡くしても洪水の危機に対処した新宮市長とともにとりあげました。

を見せていただいた授業では、新聞記事やテレビの特集番組が使われました。それらは、

いずれも未希さんのアナウンスで助かった、という被災者の声で締めくくられています。

未希さんの行為は尊いものです。そのことを否定しているわけではありません。しかし、では津波から逃げ出して亡くなった人の命、一人の命も救わなかった人の死は、未希さんに比べて軽いのでしょうか。よくとりあげられる大川小学校で、子どもたちの避難誘導を「誤った」教員たちは、死んでもよかったというのでしょうか（いまだに子どもたちだけが慰霊されています）。

わたしには、個人の生を犠牲にしても守るべき「(本来の公共の意味とは質の違う) 公共的価値・正義」が新たに作られようとしているように思えてならないのです。

かつて、「御真影」を火災から守ろうとして焼け死んだ教員が美化され英雄視されていったことを思い出します。それとともに単なる写真にすぎない「御真影」それ自体が神格化されていきました。

わたしたち一人ひとりの個人の生を上回るような「公」の価値って何でしょうか。そんなものは、はたしてあるのでしょうか。

話は飛躍します。かなり前にたまたま見ていたテレビ番組で、「国を守るために死ねますか」というとんでもない街頭インタビューをやっていました。みんなそれなりの答えをしていたのですが忘れました。わたしが覚えているのはただ一人。

「死ななければ守れない国なら亡んだほうがいい」

と答えた若者です。わたしは、立派だと思いました。

がんばれ、ニッポン！

このかけ声に危うさを感じないですむ国にしたいと思います。少なくとも、由美さんたちの世代に、今わたしが考えたような次元での問い詰め方をしないですむ世の中にしたいものです。

うれしいお知らせ

3月3日の第10回大会で石井順治先生が講演して下さいます！

三重県のみならず、東海地域を中心に国語教育界に大きな実績を刻まれている先生です。ご講演を快諾してくれました。詳細は決まり次第報告します。石井先生のお話を聞きたい、という方にどんだん声をかけて大会に誘いましょう。3月3日（土）午後1時から5時の予定です。会場は三重大学です。

★これからの予定★

- ◎ 11月12日（土）三重例会
午後2時半～5時 三重大学教育学部国語教育ゼミ室
実践報告・原田聡子さん「いちねんせいの うた」
- ◎ 11月19日（土）奈良教育大学附属小学校研究会
- ◎ 12月10日（土）奈良例会
- ◎ 12月17日（土）三重例会と忘年会（ちょっと気が早いかな）

◇語り合う文学教育の会会報◇ 文責＝橋本博孝
連絡先 514-8507 津市栗真町屋町 1577 三重大学教育学部
国語科教育研究室（橋本博孝）
メールアドレス hiro3614@edu.mie-u.ac.jp
電話 059-231-9210